ぼくらの詩その後

ぼくの待その後

村上政三

えにし

こんなにもひろい世の中で
こんなにも多くの人のいる中で
あなたとめぐりあうことができ
おつきあいできるとは
なんとありがたいことか
なんと不思議なことか
これは決して偶然ではない
人間のはからいを超えた
大きなちから
どこかではたらいている

目　次

えにし　（巻頭詩）……三

一、共に育つ……七

畏敬と共感……八

この子らと―愛すべく畏敬すべき子どもたち―　……一九

本町校の百年祭……二六

管見埼玉・川口の「作文」覚書き……二九

二、恩師……四九

恩師　下山　懋先生……五〇

教育長　富田喜久次先生……五四

斉藤忠利先生のこと……六〇

三、みづのたたへの……六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

みづのたたへの……六六
おだやかなこころ……七〇
ひとつをねがい……七四
女の顔……七八
さわらびの……八一
ことば……八五
贈り物……八八
四、ああ恩寵……九一
今ひそかに願うこと……九二
ああ恩寵……九五
齢をもらう……一〇一
五、小説ふうな……一〇五
ある夏の夜……一〇六
金平糖……一一〇
六、上り近道……一一七

上り近道……一一八
あねの声……一二一
おむすび……一二五
村上家のこと……一二七
七、園歌・校歌……一三一
あとがき……一六三
おもひ（終りの詩）……一七〇

（装丁　平野忠男）

一、共に育つ

畏敬と共感

ある日、学校に大勢の先生方が参観に見えた。この学校では珍しいことではなかった。授業中、後ろを向いてみたら、そこに長島先生の顔を見た。ぼくは、思わず、大きい声で「あっ、長島先生だ」と叫んでしまった。友だちも「先生だ！先生だ」とささやいていた。先生は、にこにこ笑っていた。ぼくは、なんどもふり返って、先生に合図をした。そのうちに、先生は、いつの間にか、教室を出ていってしまっていた。そうして、授業が終ったら横田先生に呼ばれた。ぼくは、心の中で今の時間、落着かなかったから叱られるのだなあと思って、目をつぶって先生の前に立ったら、先生は「張替君、きょうはついていたね。長島先生が見えてよかったね」こうおっしゃった。ぼくは、うれしくて涙が出てきてしまった。この涙は、長島先生への涙と、横田先生が、ぼくの心になって、いっしょに喜んでくれた、その感謝の涙だとぼくは強く思った。

これは、昭和四十六年八月六日、交通事故で尊い生命を失ってしまった張替雅彦君（当時埼大附中二年生）が、附小六年生の時書いた「わが生い立ちの記」にある、二年生の時の思い出である。一年生の時の担任長島均先生が大宮に転任してしまったので、がっかりしてしまい、泣いて母を困らせ、学校へ行くことを中止しようと決心したり、転任した先生の学校まで訪ねていったりする。それほどまでに慕ってやまなかった長島先生が研究会で、自分の教室に見えた。その時のことである。授業中、大声で叫んでしまったり、後ろを向いて合図をした。だからきっと強く叱られるとばかり思って目をつむっているその耳に、「張替君、きょうはついていたね。」という横田繁先生の声だったのである。今までどうしてもしっくりいかなかった新しい担任と張替君の心がぴったりとその時出合ったのである。　わが国精薄児教育の開拓者、映画にまでなった「忘れられた子ら」「手をつなぐ子ら」の著者である田村一二氏が自分の一生をきめる種子になったのは、小学校の時のある先生とのふれ合いであったことを語っておられる。氏は、小学生のころ虚弱で、とくに腸が弱くて、その上肛門の括約筋が弱かったため、尻が臭いといって友だちにきらわれた。学校に行っても運動場の隅っこで、しょんぼりひとりぼっちでみんなの遊ぶのを見ているだけだったという。その氏が、ある日、運動場の隅の便所で小便をしていると、いき

なり若い男の先生が飛びこんできて、氏のすぐそばで小便をし始めた。そして済んだとたん、先生は、ふいにその手で氏の頭を撫でてくれた。（邪推をすれば、手についた滴りをぼくの頭でふいたかとも思えるが、と言っておられる）声をかけられ、体にふれられたのは、入学以来初めてのことで大へんうれしく思ったのは当然なこと。そこで、それからは、その先生が運動場で遊んでおられるのを一生懸命見ていた。そしたら、何日目にか、ッーッと走ってきて「オイ、タム」といってクルッと頭をなでてくれた。たったそれだけのことであったそうであるが、先生へのあこがれを持たせ、ああいう先生になりたいと思うようになったという。若い元気のいい先生のさりげない行為が、孤独な田村氏の心に希望の火を点じたのである。

こうしたことは、わたしの教師生活の中でも何度か経験している。ある時、某県の校長さんから、今度大変乱暴な子が転校して行くからという電話があった。数日後その子が一年生にはいってきた。幾日もたたないうちに、異例の申し送りにそむかない狂暴ぶりを発揮しはじめた。授業中歩きまわって友だちのノートを破る、女の子の髪を引っぱる。その子のために授業が中断されるということがしばしば起った。そして強く叱れば叱るほど、その乱暴はひどくなった。この母親は夜おそくまでの仕事をしているため、子供が邪魔に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なるというので、生まれるとすぐ、実家に預けてしまった。ところが預った方でも、とんだ子を預ったものと、その子を邪魔者扱いにしたらしい。学校にあがっても皆からきらわれて、手のつけようもない乱暴者となってしまったらしい。今度その学校からの話で実母のところへやってきたのであった。実はこの母の仲間の子ども八名ほどがすでに本校にきていたのであったが、それも常習遅刻で学校を困らせていた。それがついさきほど解決したばかりだったのである。

考えてみれば、まことにかわいそうな話である。どこへ行っても厄介者扱いをされたのでは、この子が反社会的に育っていくのは当然なことである。このことから、この子を特別扱いにしないが、接触機会を多くして、暖かく見つめていくこととした。PTA学級委員長は、自分の子どもをこの子と机を並ばせてほしいと申し出てくれたりした。父母も学友たちも積極的に親しむようにした。そのため、この子の乱暴はだんだんと減ってきた。二年生では、母性的なものが欠けているというので女教師に担任してもらった。しかし、何度か乱暴ぶりを発揮して、校長室につれてこられることがあった。

三年生になったある日、足を引きずるようにして教室にはいってきた。担任の新井忠雄教諭が調べてみると、体のところどころにハイヒールでなぐったようなアザが出来ている。

新井教諭は早速、電話口に呼び出した母親に「誰がこんな傷を負わしたのか。いくら本人にきいても言わないが、一体誰がこんなむごいことをしたのか。」新井教諭のすさまじい見幕に驚いたその子は、新井教諭の手にすがりついて止めるように涙声で懇願した。新井教諭は「やめてくれと子どもが言うのでやめますが、これは許すことの出来ないことですよ。今後このようなことがあったら決して黙ってはいませんから。」と電話を切った。「この先生は自分のことをこんなに思っていてくれる。」「ほんとうに考えていてくれる」と思ったからであろう。その日から態度ががらりと変った。しかし残念なことにその子は転校して行ってしまった。母親が今までの仕事をやめてくれたのだという。恐らくは、この子のことを考えての処置だったと思われる。

今まで担任の先生との仲がしっくりいかなかった張替君の気持ちを変えさせたのは、横田先生の心憎いばかりの余裕ある態度であった。わたしはこの文章を読んで全く心を打たれた。児童の心をここまで察することは容易ではない。察し得られたとしても、このことばは発し得られるものでない。我執が必ずこれを妨げてしまうものである。授業を混乱させられてしまった。しかも、その授業は他校の先生方を多く迎えての研究会の時なのである。平静でいられるはずがない。頭の中が怒りでいっぱいのはずである。しかし、横田先

生はこの我執をぐっと抑えてしまった。そして、この子との共感をものの見事に成立させていらっしゃる。まことに冴（さ）えたふるまいと言わなければならない。どうしたらこのような心境になれるのであろうか。

田村一二氏の話では、その名も覚えていない若い先生のさりげない行為が、孤独な田村氏の心に希望の火を点じてくれたのである。いつも心の底深く思っていることは、折りにふれ機に応じて必ず現れるのである。何気なく、全く何気なく行った行為が相手の心に深く刻まれて、その人の生涯を動かす力となるのである。では一体このようなさりげない行為が出来るようになる根源の力はどうして養われるのであろうか。

三番目のある子どもと新井教諭の例では、人間形成の最も大事な乳幼児期に、そこなわれたものは、容易に直るものではないことをあらためて教えられる。乳幼児期に植えつけられた基本的不信はなかなか拭えるものではない。乳幼児期に『基本的信頼感』を形成することがどんなに大切なことか。しかし、学校全体の暖かい思いやりを背景として行った新井教諭の真実な行為は子どもに「生まれかわる」ことを可能にしたように思われる。

チュービンゲン大学のO・H、ボルノー教授は、教育が成功するための情感的前提を「教育的雰囲気（ふんいき）」という概念で言いあらわしている。そして、それは教育者

と児童とが「ひとつの共通な包括的な気分」のなかで相互に情感的にいわば響き会う関係が生じあうことを指している。このような気分、これがあらゆる効果的教育にとって欠くべからざるものとなっていると論述を進めている。これは前述の諸例の如き教師と児童との出会い、共感を言っているのであると思う。共感にもとづいてかもし出される雰囲気、それを指しているのだと思う。

大村はま先生は「教師の仕事」という講演の中で、

「至らない子どもでも、何もできない子どもでも、見ていて悲しいほど自分を伸ばそうと思っております。私たち指導者は、その子どもたちと同じ気持ちになることが、まず大事でしょう。かわいがるといっても、つまり、同じ気持ちになるということは、そういう、子どもの持っている切ない伸びたい気持ち－本人は意識していないでしょう－、そういうものを私たちが意識して、同じように研究や学ぶことの苦しみ、そして少しの喜び、そういうことを感じえているということだと思います。いくつになっても、三十歳や四十歳になっても、少しもおそれることはないので、そういう魂というのは、世代をこえていつまでも子どもと共にあるということになるのでしょう。いくら二十代の若さだと言っても、伸びようという気持ちを切にもたない人は、どうして少年の友であろうか、と思います。

伸びたいと切に思っていない人、伸びようと努力しない人は、少年からは無縁の人だと思います。子どもとは、もはや、たいへん違った世界にいる人という気がします。若さだけに頼っていたら、若くなくなったらそれでおしまいなのではないでしょうか。そして、どの人もみな、いつかは若くなくなる日があるのです。若さだけに頼って、子どもに近づこうとしても、そういう生き方では、まもなく子どもと別世界の人になってしまう日がくると思います。私たちもより高いものに憧れ、研究の苦しみと喜びをひしひしと感じながら、それをもって、いつまでも少年の友でありたい。ほんとうの少年の指導者でありたいと思います。」

以上は「私たち教師は、人間の力、人のよさ、子どもへの愛情、そういうものに自信をもち過ぎないで、そういったことはあたりまえというふうに考えて、教師でなければ出来ないといったような技術をじゅうぶんに練りたいものです。」と述べられた後に続くことばである。

子どもとの深い共感は、共に伸びようという切なる思いからの絶えざる研究、授業の工夫の継続から将来するものである。そして、それは教師の人柄などから自然と安易に得られるものではないと力説しておられる。まことにその通りであると思う。芦田恵之助先生

の最後の書物は「共に育ちましょう」であった。これは先生の生涯を貫く教育信念の結晶したことばであって、師も親も子どもと「共に育ちましょう」であった。これによって教育易行の道はひらけ、世はきわめて平和なものになる。これが先生の信念であった。

この共育、この共励による共感の背後にあるものが子どもたちへの畏敬の思いである。そのことを大村先生は次のように述べておられる。

「教師はやっぱり子どもを尊敬することがたいせつです。さしあたり年齢が小さくて、先に生まれた私が先生になりましたが、子どもの方が私よりも劣っているなんていうことはないんです。劣ってなんかいないで、年齢が小さいだけなんですね。子どもを心からたいせつにするということは、そういうことを考えることです。」「子どもはほとんど全部教師よりずっとすぐれていると思って間違いなしです。そういう敬意といいますか、尊敬を心からもって、この宝物をたいせつにしたいと思います。」「年齢が小さくて、子どもっぽいのに気がゆるんで、ことばが乱れたり、態度が乱れたりすることはこわいことだと思います。」「子どもを大事にするとよく申しますけれども、やさしくするくらいのことは敬意を表することにならないのです。」「この子は自分なんかの及ばない、自分を遠く乗り越えて日本の建設をする人なんだ。ということを授業の中で見つけて、幼い子どもを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com